

DIALOGUE 2008

京都の通りをデザインする

2008年度 京都デザイン会議

The street of Kyoto is designed.

A vertical calligraphy work featuring the 'Poem of the Eight Immortals' (八仙詩) by Wang Xizhi. The text is written in cursive script (caoshu) in brown ink on a light background. The characters are fluid and expressive, with varying line thicknesses. The poem consists of eight lines, each starting with a character from the phrase '八仙過海各显神通'. The characters are arranged in two columns: the first column contains '八', '仙', '過', '海', '各', '顯', '神', '通'; the second column contains '王', '羲', '之', '書', '於', '時', '人', '傳'. The overall composition is dynamic and elegant.

卷之三

2008年度 京都デザイン會議

京都の通りを デザインする

日 時／2008年2月22日(金) 18時～20時
会 場／新風館3階 トランスジャンル

The street of Kyoto is designed.



Coordinator

大石 義一 氏

京都造形芸術大学教授・京都デザイン協会理事

Panellist

寺本 健三 氏

財団法人京都市・景観まちづくりセンター事務局次長

ランディ・チャネル宗榮 氏

茶道家

元橋 一裕 氏

エディトリアルデザイナー・元「京都CF」編集長

土居 英夫 氏

建築家・京都デザイン協会理事

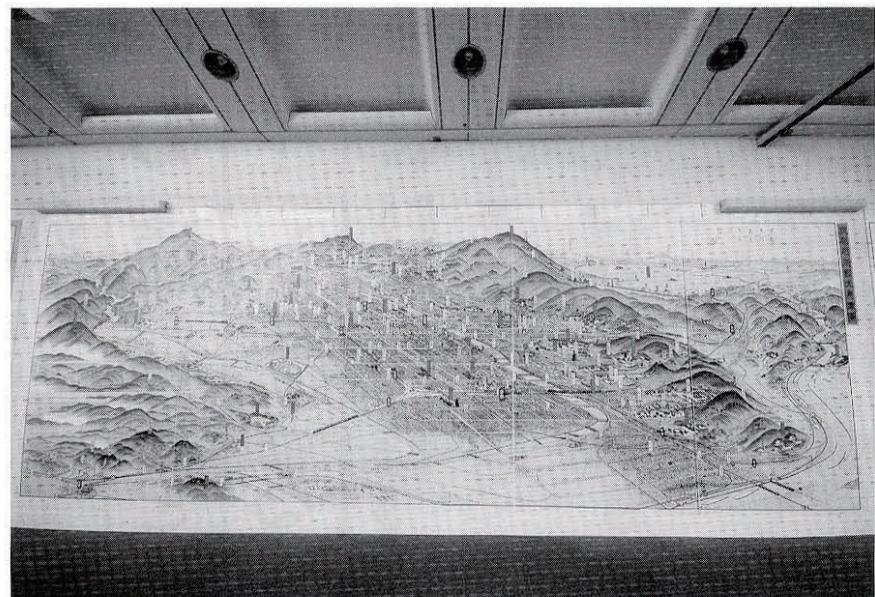


大石義一氏

大石 京都デザイン関連団体協議会と京都デザイン協会の主催で毎年開催している京都デザイン会議は、この3年ほどはプロダクトデザイン系の話を中心に進めてまいりましたが、今年度は「京都の通りをデザインする」というテーマで進めることにしました。京都デザイン協会が40周年を迎えるに当たり、人をデザインする、物をデザインするとともに、京都の都市環境そのもののデザインに高い関心を示し、活動していこうということになりました。

同時に、昨年9月1日には京都に新しい景観条例が施行され、いよいよ京都の町の景観デザインに対しての動きが具体化しました。それに対してデザイナーや、市民が具体的にどのように対応していくべきなのかも、デザイン協会の大好きなテーマになろうかと思っております。このことも大きな契機になりました。

まずは街を観察し、観て歩き、街のデザイン要素を探すことから始めることにしました。そして街を見ていくのに一番手っ取り早いのが通りではなかろうかと考えて今日のこのテーマを導き出したわけです。そこに住んでいなくても



河原町六角の工事現場の万能鋼板の絵

通りは歩けますし、京都のような観光都市では、通りは大きな役割を持っています。また、道から日本の文化が発生したとすら言っていいと思います。つまり、道を通じて町のコミュニケーションが生まれたし、道を通じていろいろな出来事がありました。実際、広辞苑を調べてみると「道すがら」「道端」「道草」「道行き」と、道にまつわる文化が随分たくさん語られています。また、私の小さなころは、子供たちはほとんど道で遊んでいました。

その「通り」を、京都のまちの中でどのようにデザインしていくといたらいいかということを、今日は4人の方からお話をいただきながら、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

では早速、京都の景観条例の制

定に携われ、この新風館近くの三条通にも幾つかの仕掛けをなさったという寺本さんにお話を伺います。

寺本 景観まちづくりセンターは、市民と行政、企業の皆さん方との町づくりの橋渡しをせよ、触媒になれということで10年前に設立され、いろいろな活動をしています。その中で、たまたま私は三条通といろいろなお付き合いがありますので、そのお話をさせていただきます。

東宝の映画館の建て替え工事現場の万能鋼板に描いてある絵は、吉田初三郎という「大正の広重」といわれる方が描いたものです。非常にデフォルメされた絵ですが、京都盆地の地形がよく表されています。

延暦13年794年に桓武天皇が長岡京からこの地に都を遷された際、桓武天皇はこの地を言祝ぎ、「山河襟帶 自然城を作す」というお言葉を残されました。山と川が襟を立てたり、帯を回したようにこの土地を取り囲んでいる、まるで城のようだ。これからは山城の国と呼びなさいと。それまでは平城京の山の背中にある山背国だったので、それから山城国と呼ぶようになったということです。

この絵を見ていたいたら分かるように、三方が緑なす山で、鴨川と桂川がこの土地を取り囲んでいる、この景観の骨格は1200年たっても変わっていないのです。

広重の東海道五十三次では、日本橋とこの三条大橋が東海道の起点になっているということで、今でも147万の市民が生活する大都会に、きれいな川が流れています。パリやローマに行っても、セーヌやテレペ川が流れていますが、こんなにきれいな川ではありません。鴨川は、やはり京都が世界に誇る川でしょう。その川の上に、秀吉が造った三条大橋が今も架かって



三条大橋

います。

ずっと西の方に行くと、安藤忠雄さんが設計したタイムズがあります。川と親しむために造ったという、非常にいい建物だと思います。

それからまたずっと西へ行くと、三条名店のアーケードがありますが、ここにあるJEUGIAさん、森永さん、さくら井屋さんの共同ビルは、私が十数年前、この三つを一つの建物にするという共同化のお手伝いして、非常に苦労した案件です。

三条通には、三条の橋からずっと西まで、明治になってからいろいろな建物が建ちました。東海道のつながりという意味で、明治初年にもやはりメインストリートであったということで、例えば今は府立文化博物館になっている日本銀行の京都支店や中京郵便局など、いろいろな近代化遺産が残っており、その間に町家も残っているということで、ここは非常に景観上面白い場所です。

昭和60年に、京都市は歴史的界隈い景観保全整備要綱で、近代化遺産を含めた街並みの保全に着手



寺本健三 氏

しました。ただ、当時の三条通は通過交通が非常に多くて、実は人通りは少なかったのです。また、祇園祭は今は17日に巡行が行われますが、当時は先祭と後祭の2回に分かれていて、三条通を後祭の山がずっと巡行していたのですが、交通問題で廃止されて一つにまとめられたということで、三条通の人たちは非常に寂しがっておられました。

その中で、平成6年、40周年を迎えた京都府の建築士会では、その記念事業として建都1200年事業に合わせてまちづくりを手伝おうという気運が盛り上がり、寺町通から新町通の7町内に呼びかけて、協議会を組織してまちづくりをしましょうという提案を行いました。

その成果として挙げられるのが、歩車共存道路の導入です。歩道の



JEUGIA · 森永 · さくら井屋共同ビル



旧家邊徳時計店辺り

舗装が石畳風のインターロッキングになっていて、車の通る真ん中は普通のアスファルトです。歩道が特別仕様になっていることで、歩きやすくなり、車道が狭くなるので車が遠慮して走るという効果がありました。町並みに調和したできるだけシックなデザインの舗装になるようお願いして、それに合わせて、電柱はなくなっていますが、架線がなくなっています。そのような整備を、京都市の道路維持課がしてくれました。

そして現在は、問屋さんや銀行の横にマンションが建ち、ブティックや飲食店が非常に増えています。加えて、新風館が今の場所にオープンしてくれたことで非常にぎわいが生まれ、一昔前の北山通のにぎわいが最近は三条の方に移ってきたともいわれています。また、いろいろな歴史遺産も壊さずに、例えば元毎日新聞京都支社などは建築家の若林さんが買い取って活用してくれているということも含め、非常に面白い通りになっています。

面白いのは、弁慶石などの民俗



弁慶石

資料のようなものが、今でも残っていて、大事に保存されているということです。弁慶が愛した石だというのですが、これが平泉から飛んで来たと書いてあります。駐車場の1階にも非常におしゃれな店舗が入っていて、この通りにふさわしいしつらえがなされています。

旧家邊徳さんのような、歴史的な建造物も残っています。SACRAビルは大正ぐらいに建てられた表面が石造りの建物ですが、それに合わせて後ろの増築建物も、界わり景観整備地区内ということいろいろデザインしていただきました。京都三条日本生命のビルは、全部は残せませんでしたが、角の塔の部分は残っています。

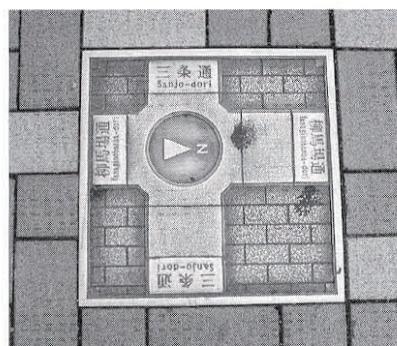
國島器械さんは、いろいろな計器や実験材料の問屋さんです。十数年前、一緒に伊勢のおはらい町に見学に行ったときに、「最近、三条通も非常に若い人も多いし、うちもガレージにしつかんとちょっと物を置くわ」と話しておられましたが、実際そのとおりになっています。真ん中の所はもともとは土間だったのですが、そこに万歩

計やプラスコ、ピーカーなど、変わったものが置かれています。これも町づくりによって地域住民、地域の商店が活性化した証拠かとも思います。ここでも道路維持課が頑張って、道路標識を地面に埋めてくれたのですが、真鑑で作った非常にいいものです。

ほかにも、イノダコーヒーさんなどが入っている町家など、産寧坂や祇園新橋のような、様式のそろった町家が並んでいるわけではありませんが、それぞれ個性を持ついい建物が並んでいる、それがこの通りの特徴かと思います。

左側は足袋の分銅屋さんです。非常に立派な塗り込めの町家です。右側の長谷川松寿堂さんは元は町家だったのですが、どうしても面積が足りないということで建て替えられたのですが、元の建物を彷彿とさせるような建て方をされています。ちなみに、平成7年の景観賞を受賞しています。

ずっと西に行きますと、旧日本銀行の京都支店があり、ここは府立文化博物館になっています。それから中京郵便局、これも中だけ



真鑑製道路標識



府立文化博物館辺り

全部そっくりと造り替えられた恐らく一番古い事例です。

まちづくりを進める中でNTTさんから外装を塗り変えるという話があったときに、少しでも歩きやすいようにということで地元から要望してきたポケットパークがあります。

7月24日は、イベント、夜祭りが行われます。三条通に三つのお神輿が、東に向かって巡行します。例えば文化博物館の前でおねりをしてもらうなど、町内会やまちづくり協議会の方で、にぎわいを生み出そうという活動をずっと続けています。

三条の誉田屋さんや文椿、これも古い建物です。

三条通の西に行くと、町家が今でも残っています。今後まちづくりセンターでは空調の室外機の修景支援をしようとしていますが、すでに自分たちでやられています。意識が高いのだと思います。

室町通と三条の角にある会社の敷地の角に建っている碑には、「洛中の五色の辻に家居して み祖の業を いまにつたふる」と書いてあります



吉井勇歌碑

ます。ここにあった商店は、450年前の室町時代からずっと続いていました。今はもうしまってしまいましたが、さりげなく吉井勇の歌を植え込みの中に入れてあります。取り止めのない話になってしましましたが、三条通が今の状況になった経緯を含めてご説明しました。

大石 狹い通りでの歩車分離は、普通は白線を一本引くだけなのですが、それを三条通りの両サイドの歩道を段差をつけずに石の舗装するだけで車が遠慮して走るようになる。歩行者は歩きやすくなり、いろいろなお店も出てきて町が活性化してきたという。歩道のデザインが人々にある種の方向を導いた非常にいい例だと思います。

次に、同じ三条通りですが、堀川通りから西にある三条会商店街でオフィスを構えていらっしゃる元橋さんにお聞きします。

元橋 今から20年ほど前、私が「京都CF!」の編集長をしていたときに、電通PRの方と一緒に京都の街中の6商店街を活性化しようというイベントを、「京都CF!」の本誌でやったことがあります。一般読者の方に使い捨てのカメラを差し上げて、河原町商店街や錦通商店街、四条繁栄会などの面白い場所をどんどん探して撮ってもらって、いちばん町らしい顔を切り取った人にグランプリをあげようというイベントだったのですが、そこで感じたことは、商店街というのは旦那



元橋一裕 氏

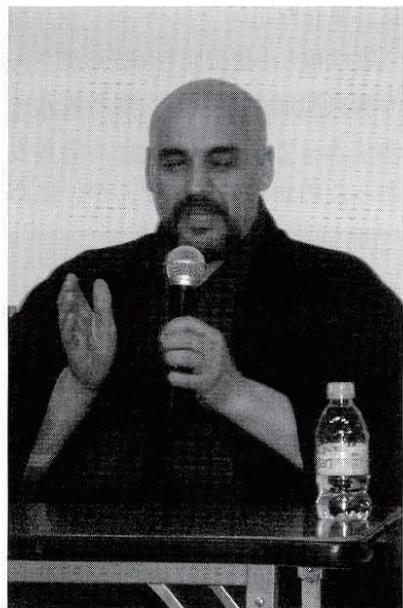
連中が割とプライドをお持ちでいらっしゃって、なかなかメディアや一般の人たちと結んで商店街を活性化することが難しいということでした。

その後、私は独立して事務所を構えることになり、いろいろと町を歩いていたのですが、オフィス然とする事務所がどうもびんとこないのです。そういううちに、ある友達を介して「三条会商店街に来ないか」という話がありました。なんと路面ではないか。何か商店主みたいな顔をして事務所を開くのも変だなとも思ったのですが、ボスの芦屋小雁師匠と一緒に、そこに事務所を構えることにしました。

実は私も小雁師匠も師匠の奥さんも皆呉服屋出なので、割とスムーズに入ってこられたということもあったのかもしれません、住めば都で、大変人情的というのか、向こう三軒両隣、いきなり新参者が入ってきても、温かく迎えてくれる町だと思いました。また、立命館大学の新しい校舎が千本通に出来て、学生たちも行き交うようになりました。とはいえ、商店街には今、高齢化社会が到来しています、どんどん店をしまわれる

方が増えているのです。ただ、そこに新世代の人々がうまく入ってきていて、「サラサ3」や若い青年が靴を直してくれる「凜靴(りんか)」という店もあれば、お酢のバー「酢ぶらす」も入って来ましたし、今、私の横にいらっしゃるランディさんも「らん布袋(らんほてい)」というカフェを開かれました。また、サラサ3のオーナーが新たにモダンなモザイク張りの自転車屋を開かれたりと、新しい世代と今までずっとそこで商売をされていった人が一体となってきています。

京大の金田教授が、文化的景観とは、「人々が生活している地域に、生活しているそのまで好ましい景観をつくっていくことだ」とおっしゃっていますが、まさにそういう商店街に三条会商店街はなってきていると思います。皆さんもぜひ一度、最近の三条会商店街を歩いてみてください。



では、同じ住人で、最近仲のいいランディ・チャネル宗榮さんにマイクをお渡しします。

ランディ・チャネル 私はカナダの出身ですが、来日の目的は武道の勉強で、来日と同時にお茶も始めました。私はもともと松本に住んでいましたが、松本は城下町ですので、商店街がある記憶がないです。松本で一番好きだったのは、お城とその周りでした。私は西海岸ビクトリアの出身で、エドモントンで育ちました。カナダは百何年の歴史しかない国ですが、私が松本で住んだ家は350年前の茅葺き屋根のファーマーズハウスでした。何だかすごい、面白い。ただ、そこはとても田舎で、田舎では通りのイメージはありません。今のように、すぐに隣には行けないわけです。

京都との出会いは、私が松本に住んでいたときに、毎年5月に開かれている剣道の京都大会に出たことです。初めて行ったときには、剣道の先生と一緒に誓願寺に泊まりました。そこを出ると、すごく京都らしいいろいろなものを目にすることができます。松本には絶対にそういう所はありません。それからたびたび京都を訪れるようになったのですが、京都では三条や烏丸がすごく気に入って、初めて輸入食材を扱う明治屋に入ったときには涙が出るぐらい懐かしいと思いました(笑)。それから、今はあまりありませんが、そのころ

には外人さんが道端でペインティングをしていたり、いろいろなものを売ったりしていました。たまたまその中の一人が、私が香港に住んでいたときの近所の顔見知りのフランスの方で、それからは毎年、彼の家を訪れるようになりました。彼の家は左京区の武道センターの近くの、とても古い町家でした。寺と寺の間に町があって、昔の門や垣の奥の方に家がある。それから、いろいろな新しい建物と古い明治時代ぐらいの建物、明治と大正ぐらいの町家がある。その雰囲気が、外人から見るとても面白くて、私が松本で住んでいた家は、確かに古いのですが町家の雰囲気はありませんでしたので、私はとても町家が気に入りました。

その後、松本から京都に移り住むことを心に決めたのですが、今の私の家は町家ではなくて、普通の戦後の洋風の家で、和室は一つだけです。それで、私は自分で四畳半の茶室を作りました。場所は上京区の区役所の真後ろ、新町と室町の間です。私の家は角家なのですが、その私の家の前で、必ず毎日おばちゃん何人かがべちゃくちゃとおしゃべりをするのです。椅子とお茶を出して、どうぞと声を掛ければ、多分、自分の店よりもうかるかもしれません。

私が京都に来た目的は、裏千家専門学校に入ることで、3年間勉強してから自分の教室を開きました。今の教室は梨の木神社で、そこはすごくいい景色です。御所の隣で、



ランディ・チャネル宗榮氏

京都のど真ん中ですが、自然に囲まれていて、萩もあるし藤もあるし名水もいい。町の中にいる気がしない、本当にいい所です。私もとてもラッキーな人生だと思っています。

そして最近、去年の5月24日に、三条会商店街に店を開きました。どうして三条会商店街を選んだか。三条会商店街の西側に、アメリカ人のボディビルジムがあって、私はそのジムによくトレーニングに行っていたのです。三条会商店街は、とてもfriendly neighborhoodで、とても日本的な感じがして面白い。とても気に入って、インターネットで物件を探して見に行きました。最初はちょっと狭いかなと思ったのですが、奥の方に入ると吹き抜けがあって、それを見た瞬間、ああ、これはいいと思って決めました。天井をぶち抜いて柱や梁が出るよう全部改装して、すごく気持ちのいい空間になりました。

三条会商店街なんてじじばばくさい所には誰も来ないのでないかとも心配しましたが、今、三条界隈はだんだん変わってきているようです。今度、両隣にも写真館や美容室が入るそうです。今は

シャッターが下ろされていて、外観はどうなるかは分かりませんが、その二つとも町家を守ると聞いています。三条会商店街には、70年代のままのところが残っていて、今、日本の観光客にもレトロな雰囲気がとても話題になっているようです。でも、ニューヨークに住んでいて自由の女神を見たことのない人が多いのと同じで、京都の人は三条会商店街に来たことのない人が多いかもしれません。私の店がつぶれる前に、皆さんぜひ一度、顔を出してください（笑）。

大石 僕は京都に来て40年以上たつのですが、先日、本当に初めて三条会商店街に足を踏み入れました。今お話をあったように、ややレトロで、幾つかがもう改築というか建物が新しく変わりつつある。ただ、900メートル全部にアーケードがかかっているのです。それが三条通の向こう三軒両隣的な雰囲気をかもし出しているデザインの最大の要素で、言ってみれば目に見える形のデザインだと思います。

もう一つは、ランディさんは、茶道家でもあり武道家でもある。つまり、「道」に精通しておられて、精神的なアンテナが非常に鋭いのだろうと僕は勝手に思っているのです。従って、左京区のお友達の家に行かれる途中に見た通りの良さなど、ランディさんを通じての、独特のものがあろうかと思います。

それともう一つ、ランディさんの今のお住まいの横でおばちゃん

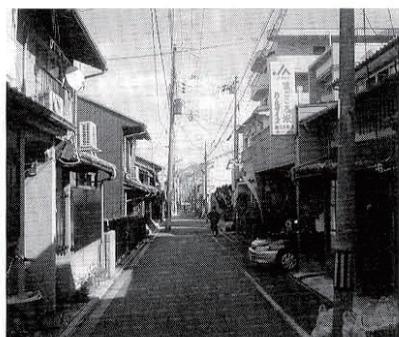
たちがべちゃくちゃしゃべる、これは日本の道の中の「辻」に当たります。辻説法とか辻斬りという日本の言葉もありますが、辻というのは、流れからいうとちょっと空気感が淀むというか溜まる場所なのです。ですから、ランディさんの家の軒先は、辻会議のようなことを皆さんがやるのにふさわしい。これも通りのデザインに必要な要素かもしれません。そういうものが、ある意味では発見できたと考えられます。

最後になりましたが、土居さんは建築家でもいらっしゃるので、景観に関して常々考えておられて、独自に京都のいろいろな通りをサーベイなさって、通りのデザインはどこにあるのだろうということを研究されたようなので、その辻を含めてご紹介ください。

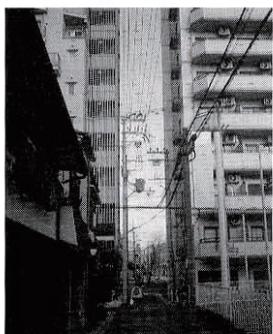
土居 私は今までのお話とは逆に、これから活性化させなければならない通り、あるいは、あまり京都らしくない通りの風景もサーベイしておく必要があるのではないかということで、私が生活している通りを中心に調べてみました。

千本通から東に入った上長者通りは、生活観のある通りなのですが、道幅が狭く、住宅が建て込んでいるために、電線があたかもクモの巣のように張り巡らされているように見えます。そして、その先に電線に絡まるように大文字が見えるのです。普段見慣れてしまった風景なので、何とも思わなくなつて

いるのかもしれません、これは京都の通りにおける景観としては好ましくないと思います。また同様に、当協会の事務所の北側に一条通りがありますが、堀川通りに面して建つ大きなマンションのその狭間から電線に絡まるように大文字が見えます。



上長者町通りから大文字を望む



マンションの隙間から大文字を望む

京都は山に囲まれた盆地ですから、通りから抜けた先に美しい山が見えるので、通りをデザインするときには、抜けた先の視線、アイストップに対する景観デザインを考えなければいけないのでないかと思います。

次に七本松から東に入った一条通りにある景観ですが、ここにはミニ開発という手法によって建売

住宅が建てられています。多くの住宅が建ち並んでいますが、それぞれの建物にデザイン意図がなく、張りぼての家や、タイルが無造作に貼られた家、周辺環境を無視した色使いの家などが、古い町並みの中に違和感のある景観をつくり出しています。



周辺環境を無視した建て売り住宅

1階部分が鉄筋コンクリート造の駐車場としてつくられ、その上に木造3階建てが建てられています。実質的には4階建ての建物となってしまい、また、敷地一杯に建てられているため、その高さと圧迫感によって恐怖を感じる通りの景観です。



4階建ての住宅

そしてまた、ここからも上長町通りと同様に電線に絡まるように大文字が見えます。



一条通りから大文字を望む

次に、今出川通りから紙屋川沿いを下がったところにある通りの景観です。1987年に建築基準法が改正され、木造3階建てが建てられるようになったのですが、この建物は

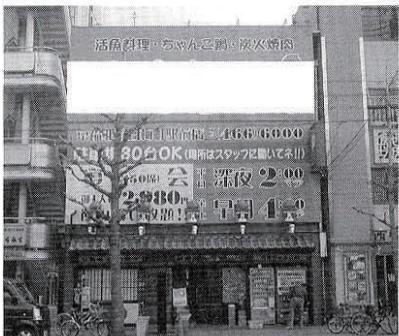
続いて北野白梅町付近における今出川通りの景観です。古くて雰囲気のある木造住宅ではありますが、その住宅の前を自販機が埋め尽くしているのが残念です。



自販機で覆い尽くされた住宅

また、その向かい側にある店舗は建物全体が看板になっており、その色使いも強烈で、あまりにも景観を

無視した店舗ではないでしょうか。



建物全体が看板化した店舗

次に室町通りですが、一つの通り名が一時代を画する呼称になった由緒ある通りです。そして、かつては着物産業がその隆盛を極め、京都の経済を支えていた通りでもあります。現在、平日の昼間はトラックや乗用車による交通渋滞によって、安心して歩くということが出来ない通りになっています。また、箱形の建物やマンションが建ち並び、室町通りという京都らしい通りの名前からイメージする京都らしい通りの景観とはなっていません。



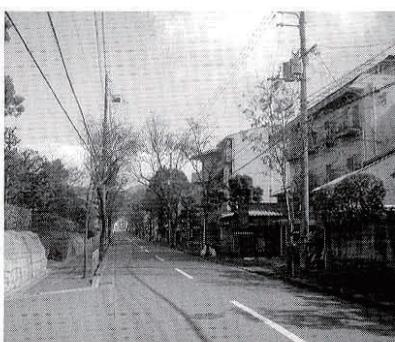
室町通り

ここまででは京都らしくない通りの景観ばかりを見てきましたが、ここからは、それらをどのように修景して行かなくてはならないかということについて考えてみたいと思います。

これは1週間ほど前に撮った白川通りの写真です。ケヤキ並木に葉がないので殺風景な感じもしますが、並木が両サイドに建っている異なるデザインの建物や看板等を視覚的に消し去り、通りの統一感を生み出しています。そして、この白川通りの並木道は、歩いているだけでも楽しいですし、ウィンドウショッピングを楽しまきたくなるような気分にもさせてくれる通りです。また、白川通りに交差する御蔭通りにもケヤキ並木があり、



白川通り



御影通り

町並みをうまくコントロールしている景観があります。さらに、この御蔭通りは東を見た時にケヤキ並木と一体となった美しい山が見えるのが印象的です。ということからも、盆地である京都においては、並木道と通りから見える山を一体化させることは有効的なデザイン手法のひとつだと言えるでしょう。京都は山に囲まれた盆地ですから、通りを抜けた先に美しい山が見えるので、それらをデザインするときには、抜けた先の視線、つまり、アイストップに対する景観デザインを考えなければいけないのでないかと思います。

次に、烏丸今出川付近の今出川通りの景観です。左側が同志社大学のキリスト教空間、右側が御所の神道空間という、通りを挟んで異なる宗教的施設が対峙している通りの景観です。さらに同志社大学の北側には、相国寺という仏教空間があり、他の都市には見られ

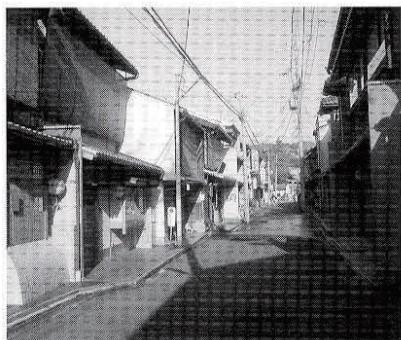


今出川通り

ない独特の空間を持った通りと言えるでしょう。

次に、私の事務所の近所にある

上七軒という花街ですが、ここは通りから西側を見ると、アイストップとして北野天満宮が見えるのが魅力的です。夜も花街としての落ち着いた雰囲気があり、魅力的な通りのひとつです。このような通りこそ、電柱や電線を地中化し、石畳を敷設して、より良い通りの景観を形成するべきだと思います。



上七軒のまちなみと北野天満宮

通りの景観デザインをするときには、場所性を考慮し、その通りが持つ性格を明確にして、デザインをしていく必要があると思います。それから、先ほど解説した街路樹を植えるという手法ですが、可能な通りと不可能な通りがあると思いますので、可能な通りに関しては、市民と行政が一体となって推進していく必要があると思います。また、壁面やスカイラインを揃えることも重要なことだと思います。特に京都においては、軒、庇、千本格子、犬矢来などの陰影をつくり出すエレメントを建物に取り入れ、京都らしい陰影のある通りをデザインしていくことが重要ではないかと考えます。また、寺本さ

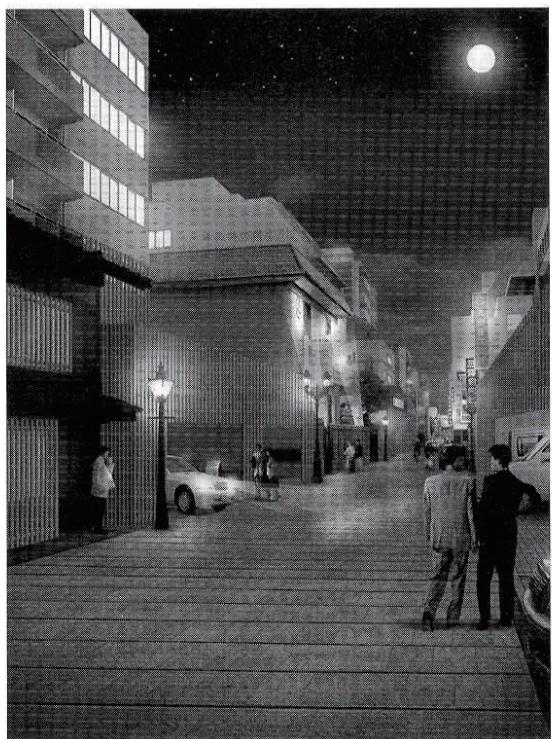
んから一条通と三条通を歩車共存通りという形で整備された話をお聞きし、車の交通量の多い通りをデザインする場合には必要不可欠な手法だと思いました。歩車道分離とは、段差を設けて明確に道路と歩道を分離するのですが、歩車共存では、歩道と車道に段差を付けずに、道路の仕上げや色を変えることによって、視覚的に歩車道を分離するという手法です。従って、京都のように狭い道路が多い通りでも、容易に施工することができるので有効な手法だと思います。それに伴って、電柱や電線を埋設することが出来ればよいのですが、共同溝をつくるとなると高額なコストが掛かるので、最低でも電線の横断を止めることによって、通りの見通しを確保したうえでデザインしてはどうかと思います。また、看板や自動販売機などにも、既にいろいろな規制がかかってはいると思うのですが、行政による監視体制を強化してほしいと思います。

次に、一昨年、当協会で室町通りの活性化について提案したプロジェクトがありますのでそれをご覧頂きたいと思います。

まず、なぜ室町通りなのかということですが、当協会の会員の中

には、室町通りに拠点を置く企業に育てられた会員が多くいらっしゃいます。それはつまり、一時代、京都のデザインが室町通りから発信されていたと言えます。現在はその企業の倒産や廃業が相次ぎ、通りそのものの魅力が失われつつあります。そこで、再び鉢まちでもある室町通りに輝きを取り戻し、活性化させるために立ち上げたのがこの室町プロジェクトです。

そこでは最初に、企業に対してヒアリングを行ない問題点の抽出を行ないました。そこで分かったことは、新商品の開発につながるソフトの開発が進んでいないことでした。そこで、芸術家や図案家が作成した作品群を整理し、新たな商品開発に再活用出来ないかを



提案した夜の室町通りの風景



土居 英夫 氏

提案しました。またその一方で、自社ビルが有効活用されていないことが分かりました。室町通り周辺企業全体で、約30パーセントの空きスペースがあり、どの企業もそれらを何とかしたいとの意向を持っていました。そこで建物全体を改修し、空きスペースを自社のアンテナショップやテナントを入れて有効活用してはどうかという提案をしました。そして、その改修に伴い、通りに面した部分の外壁ラインを極力整え、箱形のビルに陰影を持たせてはどうかという提案をしました。さらに、夜には街灯がなく、通り全体が薄暗いため、当協会の賛助会員である大阪ガスの協力を得て、ガス灯の設置を提案しました。

そして、この室町通りが活性化すれば、三条通り、河原町通り、四条通りが口の字型に結ばれることになり、新たな人の流れが生まれ、さらなる地域の活性化に繋がるプロジェクトになると考えた次第です。

大石 今の室町通の自社ビルの余剰空間の利用計画などは大変面白い計画だと思います。こういう通りのいろいろなデザインに関して、新景観条例ではどのように指導さ

れているのか。或いは関係するのか。寺本さんいかがでしょうか。

寺本 私の今の立場は財団の職員ですが、前職で関係していたということで少しお答えしようと思います。南部の高度集積地区や横大路は今後決めるということで、あるいは祇園新橋などの伝建地区は法律の体系が違うので抜いていますが、今回、それ以外の地域にはほぼ全部、何らかの景観規制がかかるようになりました。細かく言いますと、例えば祇園町南側のような非常に様式性の高い建物が並んでいる所は、美観地区がかかっている上に、京都市の独自政策である歴史的景観保全修景地区というものがかかっています。そういう所では建物の様式、それこそ格子がどうとか、庇の様式や寸法がどうとかと細かく規定されており、基本的にかなり厳しい規制

になっています。

今まで、美観地区は5種類の種別でしか規定していませんでした。しかし、都心の4種と西陣の4種は一緒なのかというとそうではなくて、やはり地域ごとの特色がありますから、それが発揮できるように、76の地区に細かく分けました。もっと細かくして、通りごとに新たな景観規制を作ろうと思えば作れます。ただし、規制を緩めることは簡単にはできないと思います。極端な例で、この通りをチャイナタウンのようにしたいなどというのは駄目だと思います。そのような話でなければ、地元の提案は検討の余地があるわけなので、京都市は検討してくれると思います。

理想を言えば、寺、御幸、麁屋、富、柳、堺、高と、通りの一本ずつみんな変えたらいいのでしょうか。柳馬場通、高倉通と麁屋町通とどれだけ景観特性が違うかと言われ



ると困ってしまいます。また、下京区の町家と伏見の町家が様式上どれだけ違うかというと、非常に難しいのです。例えば下京区には塗り込めの町家の比率が高いかも知れませんが、規制と言っても比率で規制はできないのです。ですから、一定の分かりやすい基準にしようと思うと、ある程度の決まった形にしかならないので、デザイナーの方はそういう規制を嫌がられるのかもしれません。

事ほどさように、地域の個性というのは非常に難しいのです。祇園新橋と上賀茂の社家町は明らかに違いますが、そういう違いは既に規制してしまっています。既に伝建地区は4地区ありますし、歴史的景観保全修景地区が3地区、三条も含め、界わい景観整備地区が7地区あります。しかもそれは都心部だけで、周辺部の風致地区や歴史的風土保存地区なども含めると、それこそ100種類以上あるかと思います。そのすべてがすべて特徴的な通りではありませんから、通りごとに決めるまではいっていません。その辺が今後の課題だと思います。

大石 先日も、規制とは必要条件であって十分条件ではない。十分なものにしていくのはデザイナーの皆さんだという話がありました。かつて私も「京都のデザインを探る会」という会の仲間とこれからの夷川通のデザインを提案しました。夷川通の寺町から烏丸通までの間は家具屋街だったのですが、どん

どん衰退してマンション化していく、通りの特徴がぶち切れになっていました。そこでいっそのこと辻（南北の通り）ごとに大体八つぐらいのブロックに分けて、それぞれどんな街にしたいか8グループで計画することになりました。模型作品を展示しました。その結果、地元の方には高い関心を頂き、通りの再生に向けての起爆剤になったと聞いております。自分達の街は自分達で考えようから始まったようです。また、その計画の作業中に気が付いたことがあります。あの家具屋街を支えている木工職人の人たちとは、あの通りの少し奥の所、辻に入ったところや路地に入ったところにたくさんいらっしゃるということです。つまり、通りを形成するには奥行きが必要だということです。それは物理的な奥行きだけではなく、それを生業としていくためのバックボーンがあるということです。しかし、今の夷川には、そういう職人がどんどん少なくなっているようです。

元橋さん、町衆、隣近所が支え合っているところへ行かれることによって、ある種の奥行き感は感じられますか。

元橋 私も油小路通で染め屋を営んでいた家の長男だったので、まさに職人たちを奥の方にいっぱい抱えていた時代を見ていました。同志社大学で1年間講師をさせていただいておりましたが、シンポジウムでご一緒した京大の西川幸治教

授が、「予定調和のようなものがその昔はずっとあった」とおっしゃっていました。新しい人たちが入って来ても、やはりトーンやニュアンスを合わせて、同じような空気感の中で店を作るという、これは予定調和なのです。それが三条会商店街は今できていると思っています。しかし、それが他の通りにできていないのが、今の京都ではないでしょうか。

今、京都の町は「東京バブル」といわれていて、賃貸でも1万2000円～1万5000円ぐらいの坪単価だったのが、急に2万～3万ぐらいに上がってきてています。外資系とわれわれが呼ぶ東京系の資本がそれをつり上げているようです。やはり得体の知れないファンド金主がそういうビルなどに投資をしているのです。あるいは、第1次バブル期の事故物件に、そういう連中が巣くうこともあります。

大事なことは予定調和を守ることで、地元住民の力が通りをデザ



小川富男氏

インするしかないと、すごく思っています。私は町家で外食産業をなどと思っていた節もあるのですが、町家で何をしても、景観ファサードさえ守ってくれるのならそれはそれでいいのかもという気に昨今なってきました。

大石 ここで、会場の皆さんからも、私は京都のこんな通りに興味を持っているという御意見や、パネラーの皆さんにご質問をいただきたいと思います。

小川 私は少しだけ鉄道の絵を描いていますが、七条通が非常にもったいないなと思うのです。明治九年に七条大宮の角、今の陸橋の上り口の東に京都駅の仮駅舎ができました。今の梅巡中学です。七条大宮に駅を造ったのは、西本願寺に一番近かったからです。七条通には、デザイン協会にもおられる若林仏具店のビルが残っています。それから村瀬肉店本店、それから恐らく大正時代の建物だと思いますが、銀行らしき建物が4~5軒残っています。このような歴史をもった七条通りを再生できないかと思います。

元橋 ちょうど3月1日発売の「京都CF!」4月号のゲラがここにあるのですが、「京潮の香り」という連載をしていまして、次の号に「京都駅前の新たなる飲食店事情 七条通は人の流れを復興できるのか」という題で書いています。実は今、

ピックカメラや新たにプラツツ近鉄跡にできるヨドバシカメラの動線を見越して、七条通には飲食業がどんどんできているのです。面白いのは、リド飲食街と言って、昔の宿坊跡が昭和50年代ぐらいに飲み屋街になって、それが今また新陳代謝を見せて、「じじばば」「DOS」「門」「赤星」というニューエイジの店ができてきています。富士ラビットの跡はなか卯の牛丼です。ほかに、「ちゃばな」というお好み焼き屋が2軒出てきています。ほかに「石庵」と言う石焼屋や「たん味屋」や串かつ屋「こばん」を出すなど、今は飲食店争奪戦のようになってきまして、堀川・川端間はまだまだ飲食店でぎゅうぎゅう詰めな通りになるのではないかという流れがあります。

小川 そういうことは阻止できないのですか。

元橋 ここまで形がついたら

難しいかもしれません。ただ、外の通りのデザインということで言うと、七条通らしい予定調和はしているのではないかという気はしています。業種がどうかは私も分かりませんが、人の流れは変わってくるのではないかでしょうか。

寺本 今の七条通の若林さんのところ、ラビットさんの建物、それから銀行の建物が今レストランになっていると思いますが、あれなどは皆、京都市の歴史的意匠建造物や界隈の景観建造物に指定して残すようにしてもらった建物です。東本願寺と西本願寺の間、相模邸までずっと寺内町がありますが、そこも先ほど言いました三条通と同じ界隈の景観整備地区に2年くらい前に指定しました。かなり広い面積です。その中にそういう重要界隈の景観整備地区、あるいは界隈の景観建造物を指定して、残してもらう代わりに修繕費を出すということを続けていますので、私は、



寺内町はまだまだ良くなると思います。今、年間何軒かずつ修理をしていますし、あの寺内町の雰囲気が良くて入ってくる店が恐らく出てくるのではないかと思います。

ただ、飲食店だから駄目だという用途的な規制は難しいのです。例えば産寧坂でも、もともと伝建地区に指定したときには住宅もかなりあったのですが、今、あの通りはほぼ店舗、物販や飲食に変わってしまっています。形としては伝統様式を踏襲するような指導はしていますが、用途は変わってしまいます。不動産的には産寧坂などはすごく人気があるのです。ただ、その用途的はどうんどう変わってしまうので、さて伝建がそれでいいのかというご意見もあることはあります。

ですから、用途規制を変えようと思うと、それこそ特別用途地域をかけるとかということをしなければならなくて、風俗関係を規制するのは、例えば田の字の職住共存地域などはかけています。四条通もかけているし、烏丸通も今度かけました。そういうやり方はありますが、飲食まで駄目だという

ところまでは、今のところはいつていません。

小川 昔、木屋町通に市電が走っていたのですが、京都駅の入り口の東北角のルネッサンスビルの前に、鉄道友の会が建てた「市電発祥の地」という碑が建っています。町づくりの中に何か歴史的な事実のようなものを残した方がいいのではないかと思って、その写真を探しているのですが、ないです。豊臣秀吉が三条大橋を造って三条通が栄えたかというと、それだけではなく、江戸時代に高瀬川を通じて大阪から荷物を運んでくる、その船着き場が三条通にあったので三条通が発展して、室町通りにかけて大きなお店が軒を連ねたわけです。私も京都デザイン協会の人間ですが、昔、ここはどんなところだったのかということも残していきたいのです。

寺本 古い写真を後世に生かすという意味においては、例えばおじいさんおばあさんの子供のときからの写真は、きっと皆さん方のお宅などにもたくさん残っていると

思います。今年3月に、まちづくりセンターが東山の方で六波羅学区を中心に、地元でお持ちの町に関する思い出の写真を地域ごとに集めて、そこで展示するという活動をしようと思っています。例えばそういう古い写真を通じて地域の良いところを掘り起こしていくとか、あるいは人のつながりを掘り起こしていくとか、そういうことも含めてまちづくりの活動としてやっておりますし、今後も続けていきたいと考えています。

大石 会場にお越しの三輪先生、この「京都デザイン会議」の議長として一言お願いします。

三輪 この会議は、一応京都デザイン関連団体協議会が主催者になっておりますが、実情は全部京都デザイン協会にやっていただいております。ところで、今日は私、大変うれしく思いました。通りをデザインするということで、三条通のお話が出ました。実は私が生まれたのは三条堀川西に入った所で、三条会商店街の一番東の端の橋西町です。祖父の代から味噌屋



をやっていました。今、その祖父が明治29年に建てた家を保存しようと頑張っています。残してどなたか活用していただける方はないだろうかと、跡を継いだ私の従兄弟が悩んでいます。そういうことで、三条会商店街がまた元気になってきているとお聞きして、大変うれしく思います。

やはりなんと言いましてもわが町、自分が住んでいる所に愛着を持ち、誇りを持つ、自慢したいということが大事なのです。例えば、神戸の港にはいろいろなものが入ってきました。陳舜臣さんと対談をしたときに、船乗りが持つて来た本を神戸の古本屋に売って、それを翻案して出したのが日本の探偵小説の始まりだと教えていただきました。京都にも七条にステーションができたときに、いろいろ新しいものが入ってきました。七条通では、明治のころには洋服屋が軒をつらねていました。今も2~3軒残っています。それぞれの町には生い立ちがあるのです。それを調べていって、そこに誇りを見付けていくことが大事なのではないでしょうか。



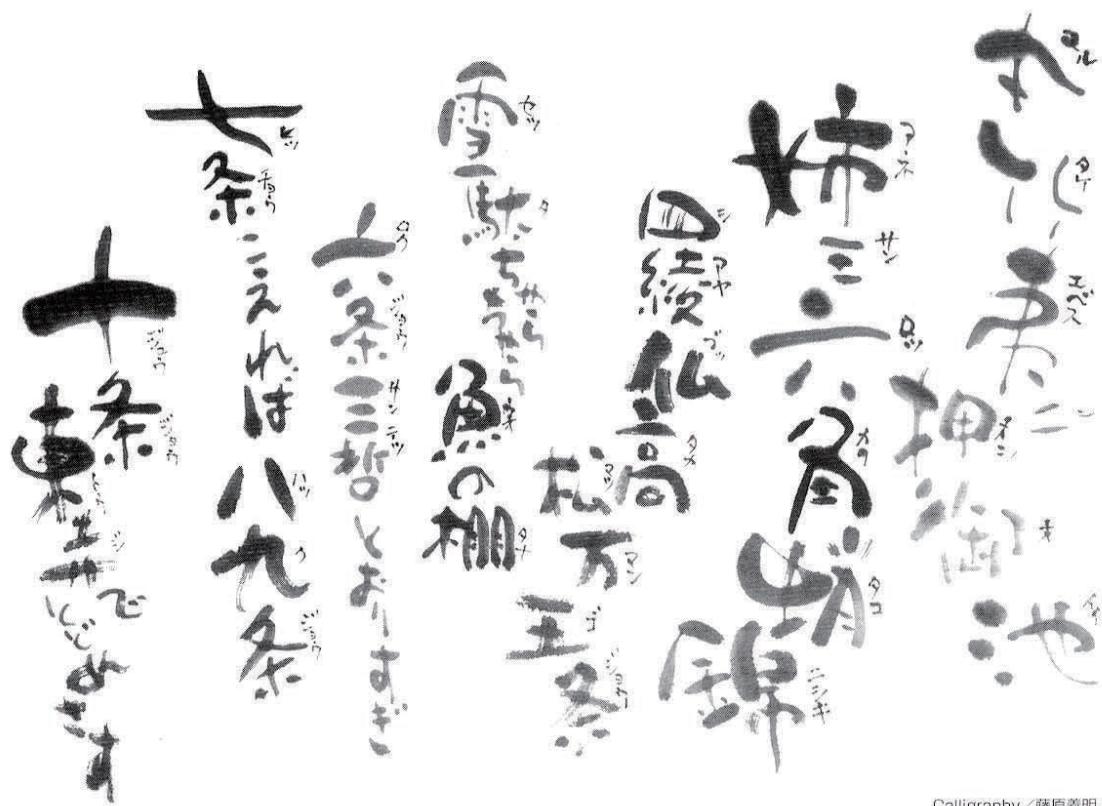
三輪泰司 氏
京都デザイン関連団体協議会 議長

私が造形大で教えていたころの大学院生で、路地を研究していた者がありました。路地は、マンションができてしまうと切れてしまうのです。路地というのは突き当たりになっていても、その突き当たりにお地蔵さんがある。その横の木戸を押したらぼっと開いて、向こうへ突き抜けられるようになっているのです。それが人々の安全を守っていたわけです。火事が起きたときにちゃんと抜けられる。そこにマンションが建ってしまったら、逃げられなくなります。非常に弱い、危険な町になってきている、

これは怖ろしいことです。路地をもう一度元に戻そうではないかと、一生懸命頑張っている者もいました。ほかにも面白いことはいっぱいありますので、それぞれのわが町、わが町内でやっていこうと、今日ここで刺激されたところです。本当にありがとうございます。

大石 先ほど私が申し上げました奥行きみたいなもの、今の路地のお話もまさにそうだと思います。それから、そこに生活している人たちの生業も含めて、一本一本の通りを見ていくことが、町を見ていくちょうど適度な大きさだということです。今日は洛中の通りの話ばかりをしていましたが、伏見の方にある大手町の通りや京都府下にも亀岡や、私の住んでいた綾部の方にも、面白い通りが幾つかあります。つまり、通りが町を支えていると言っても過言ではない地区がたくさんあるわけで、いろいろな通りを、その歴史も含めて、今後勉強していく、この「京都デザイン会議」で提案したいと思います。ありがとうございました。





Calligraphy／藤原義明

京都デザイン団体関連協議会

議長	三輪	泰司
副議長	久谷	政樹
実行委員長	大石	義一
実行委員	小山比奈子	
	土居	英夫
	永田	義博
	奈良	磐雄
	藤原	義明
	元橋	一裕

社団法人京都デザイン協会 機関誌
DIALOGUE2008
テーマ「京都の通りをデザインする」
発刊日 平成20年4月
発行 京都デザイン団体連携協議会
事務局 (社)京都デザイン協会
〒602-8233
京都市上京区葭屋町通
中立売上ル福大明神町128
京都西陣町屋スタジオ1F
TEL.075-415-8008
FAX.075-415-8028

本誌掲載の記事・写真などの無断転載を禁じます。



平成20年2月22日(月) 18:00~20:00
新風館3階 トランスジヤンル